

「“ありがとう”と牛乳を飲む」

神奈川県立相原高等学校
食品科学科 3年 齋藤 菜穂

私の在籍する神奈川県立相原高等学校は創立87年という、県下でも有数の歴史を誇り、農業系3科と、商業系3科が併設されている全国でも珍しい専門高校です。また、本校は校内を通り抜けられるように開放され、地域住民の通勤、通学、生活道路として知られ利用されていることや、広大な農地を所有し、緑あふれる自然豊かな学校です。

そして私は牛・豚・鶏といった家畜の飼育管理を行う畜産部に入部しました。畜産部では毎日の家畜の飼育管理はもちろんのこと、そこで生産された安心、安全な精肉、鶏卵といった畜産物を定期的に地域に販売しています。また安心、安全な畜産物を生産するためには、安心、安全な飼料を給与する必要があると、高騰する輸入飼料に頼らず自給粗飼料を自らの手で栽培するなど、こだわりを持って活動しています。こうした活動の中、私は、本校は地域とのつながりが非常に強く、私たちが毎日充実した高校生活を送ることができるということは、地域の方々からのご支援があつてこそだと感じるようになりました。

そんな地域の方々に対し、私には何ができるのだろうかと考えている中で、「相原牛乳」とプリントされたビンが本校内で発見されたのです。これについて調べてみると約半世紀前にあたる昭和36年ごろに、わずか数頭の本校農場飼養乳牛生産乳を原料とし生産、提供されていたことがわかりました。当時は新鮮良質な原乳と、最短流通コースからなる低価格に人気が集まり、校内職員、生徒、一部の近隣地域住民に喜ばれていたのですが、次第に乳牛を管理していくことが困難となり、相原牛乳の生産を終了してしまっていたのです。

このことを知った私は、なんとか相原牛乳を復活させ、地域に喜んでいただけるような乳生産を行うことはできないだろうか、それをいつも私たちの活動を支えてくださっている地域の方々に提供することはできないかと考え相原牛乳復活への取り組みが始まりました。

まず、本校では乳牛を飼育しておらず、メスジャージー種「うしみ」を導入することから始め、本校の獣医さんをお招きして人工授精を実施しました。

分娩予定日は約280日後。私は分娩時には助産をしたいと思っていたため分娩予定日が近づくと、「うしみ」の乳房が大きく張るようになると、新たないのちの誕生に期待が高まり、日々心待ちにしていました。

そしてついに分娩を迎えます。しかし結果は死産。思いもよらない結果に悲しみが湧く以前に、私はただただ呆然としてしまいました。私の目の前には先ほど「うしみ」から産まれたオスの子牛が横たわっており、開かないその瞳にとても衝撃を受けました。私は今まで当たり前にいのちが生まれると思っていたため、産まれるために死んでしまったこの子牛を見ると、この世に誕生するという事は、それだけでも大変なことであり、今を生きていることは

何よりも尊いことを改めて実感しました。

しかし死産だったことに悲しんでばかりもいられず、搾乳は開始されました。分娩日から毎日大量に牛乳が生産されるなか、本校には農業高校には当たり前にある搾乳室などの専門の施設や搾乳機、バルククーラーなどの設備がないため、毎日朝と夕方に1時間以上かけて手搾りを行わなければならない、それは想像以上に大変な重労働となりました。

そんな中、本校OBより搾乳機を始めとする設備をいただきました。実際に搾乳機を使用して空気などを吸わせないように衛生面に十分配慮して搾ってみると吸引力が強く、手搾りよりも安全に搾乳ができるようになりました。

こうして安全に搾乳ができるようになったことはとてもうれしく思いましたが、私にはあの時の手搾りの温かさを忘れることができません。なぜならそのミルクは子牛を育てていくための、母牛からの生命力が感じられ、手搾りで搾乳を行ったという経験は、本当に貴重なものであったと実感しています。

試行錯誤の末、ついに約半世紀ぶりとなった相原牛乳を復活することができました。地域へ販売されるこの相原牛乳は本来の風味を生かすために、紙パックに詰めるのではなくビン詰めにし、風味や成分が変質しない方法で殺菌された低温殺菌牛乳とするなどおいしさにもこだわりました。

毎日校内で販売を行い、地域住民の方々からは「あっさりしていて子どもも飲みやすい。」「生産者の顔が分かるので安心して飲めます。」など、笑顔で声をかけていただけるとき、純粋に、喜んでいただけてよかったと思うのです。私は、「生き物」である牛から、消費者の口へ実際に届くという一連の流れを体験することで、普段何気なくスーパーで購入していた牛乳が、今までとは全く違ったものに見えるようになりました。実際に体験してみなければわからない、牛乳が消費者に届くまでの過程が、見えるようになりました。

乳牛の牛乳生産は一般的に10ヶ月間とされているため乾乳期の間は安定した牛乳生産ができません。現在、本校には乳牛が一頭しかいないため、さらなる牛乳生産の拡大のためには、さらに生産量を増やす必要があると考えました。

そこで私たちはメスホルスタイン種「ショーナ」を導入。ジャージー種「うしみ」とホルスタイン種「ショーナ」、に人工授精を実施しました。

人工授精を行ってからは通常よりもしっかりと様子を見るようにし少しの変化も見逃すことのないように飼育管理を行いました。そして分娩が始まりました。祈るような気持ちで見守る中、少だけ出てきた子牛の足を縄で縛り、「今度こそは無事に生まれてきてほしい」というおもいで母牛が力むタイミングに合わせてゆっくりとひっぱり、新しい命が誕生しました。体内から湯気が立ちあがり、母牛を見つめる大きな黒い瞳が私の胸に突き刺さりました。母牛に舐めてもらいながら必死に立ち上がろうとする子牛の姿に、私は、「よかった。」そして「ありがとう」と

そんな言葉しか出てきませんでした。

すべての生き物は皆、この世に誕生してから母乳を母親からもらい、生きていきます。しかし次第に母乳から離れて、口にはしなくなるのに対し、どうして人間だけは大人になったとしても牛乳を飲み続けるのでしょうか。そこには栄養価が高いといった理由だけではないように思います。

牛乳は工場で生産されるものではなく、工場のその先にいる多くの乳牛から生産されるものです。そして当然牛乳というものは、子牛が誕生することで搾られるようになり、子牛に与えるためのものです。その過程では私が体験したように死産になってしまうこともあります。生きるか死ぬかという非常に厳しい瀬戸際の中でやっと生まれた子牛に与えるための母乳を私たちは分けてもらうことで、「牛乳」として多くの人に飲まれているのです。

こうした過程の中で、牛乳に込められた生産者の努力や苦労と、母牛の温かみを私たちは無意識のうちに感じているから、人は牛乳を飲み続けるのだという気がしてなりません。

私が牛や酪農、牛乳の生産を通して学んだこと。それは牛乳に限らず、私たちが口にする食べ物すべてにはいのちが宿っているから、「ありがとう」と感謝することを忘れてはならないことを学びました。

こうした「命あるもの」と向き合う毎日の活動の中で、私は当たり前のようなことでいて、多くの人が忘れてしまった、忘れてはならない最も尊い思いを伝えたい。

そして、「いのち」を大切にし、「いのち」に感謝するというそんな心を育んでいくことのできるような教育者を目指し、努力していきたいと考えています。

牛乳を飲むことで、牛からの生きる力や、いのちのぬくもりが感じられます。酪農から芽生えた私の小さな夢に向かってくじけそうになった時も、そんな温かな牛乳は私を力づけてくれるから、今日も私は牛乳を飲みます。
